第２回　宇都宮市総合計画市民懇談会
第３分科会　議事要旨

日程：令和４年２月１５日（火）午後２時００分～
場所：市役所１４Ａ会議室・オンライン

項目	発言者	意見
魅力・交流・文化について	市田委員	・スーパースマートシティ構想は都市機能の各分野の先進機能が融合したプラットフォームであると認識しているが、その中で特に重要な視点として市民参画があるだろう。住民目線に立った取組みが重要だと考える。スーパースマートシティという、生活を劇的に変化させる都市構想に期待はしているが、生活者の情報が一元化されることにより、データプライバシーの確保が重要となってくる。個人データのセキュリティ確保、システムの安全性、透明性といったところにしっかり取り組み、市民の不安を和らげる情報開示が求められる。市民が一番にあるという姿勢を盛り込んでもらいたい。
	岩井委員	・関係人口の充実を提案したい。関係人口の概念は数年前から出てきており、観光以上、就労未満ということで、自分の役割や仲間がその街にあるかどうか、というのが関係人口の条件となっている。関係人口の対象として、市外の人のうち、宇都宮を離れていった若い人たちというのが、重要な関係人口ではないか、と考えている。いかに市外の人が、宇都宮のまちづくりに参画する、仲間がいるという状態を作り出せるかが重要である。国でも、関係人口の先には移住、定住の想定をしているが、移住、定住は取り合いになってしまうので、自分の役割を複数もてるライフスタイルを宇都宮から発信できるとよいのではないか。 ・関係人口を推進するために、宇都宮の中に住む人が、外から来た人に対して、課題となる地区や魅力となる場所を紹介できる、まちづくりへの参画のつなぎをできるということが重要になってくる。関係人口をコーディネートができる機関として、例えば関係人口案内所のようなものを独自に育んでいってはどうか。
	上野委員	・「住めば愉快だ宇都宮」というキャッチフレーズを打ち出して市政を進めてきていると思うが、どのような効果があったのか検証を行っているか。行っているのであればお聞きしたい。また、今後は、どこに向かっていくのか、継続していくのか。 ・どうしても、宇都宮の魅力や歴史・文化について、自覚が足りないところがある。コロナ禍でわが街を見直す機会があったが、市内に良いところがたくさんあることに気

項目	発言者	意見
		づいた。市民が自分のまちの良いところを自覚するということは大切なのではないか。そのためには、自分のまちの特徴を明確にしていく必要がある。近年は大谷地区に力を入れており、2030 年にはよい地域になるのではないかと期待しているし、LRT が開通するというものも宇都宮の魅力の一つとして発信していけるのではないか。2030 年に向けた夢のある姿を発信していけたらよい。 ・子どもから高齢者まであらゆる世代検証しながら、漏れている問題点をチェックしていく事がよいのではないか。
	事務局	・「住めば愉快だ・・」に関する具体的な検証については、お示しした政策評価の中で示したものとなる。その他には、「ロゴマーク作成が 1000 件を超えた」などの成果も出てきている。もし具体の情報が必要であれば、所管課から資料提供したい。
	五艘副分科会長	・都市の魅力としては、美観が需要だと考える。宇都宮市民は、比較的暮らしに満足しているとうデータを見たことがあるが、都市の様子からはそれがあまり見えない。特にまちなかの緑が少ないということや、看板やオープンスペースの使い方に工夫の余地がある。 ・環境に意識している都市では、緑や美観が連動しており、こうした取組みは成果が出るまでに時間がかかるので、早めに施策に取り込んでいくことをしてはどうか。 ・景観の委員会では、単体の建物としての議論が多く、面としての議論があまりない。学生と話をすると、宇都宮にはのんびり歩ける美しい景観の場所が少ないという意見がある。ぜひ、美観面にも力を入れていってほしい。
	青木分科会長	・緑の少なさは以前より問題視されている。
	五艘副分科会長	・LRT 近辺など、見えるところからでも進めていくとよい。
	中村委員	・まちなかでは街路樹が荒廃していることに気づいた。特に大通りの街路樹は根元から切られているようだ。昔の宇都宮は緑のまちであり、街路樹にはセキレイやスズメがたくさん集まり気持ちを慰めたものである。街路樹はまちの緑を演出するものであり、ぜひ生かしていってほしい。 ・大谷観光は県外の人にも人気のようだ。大谷地区と宇都宮のまちを自転車で往復できるように整備してはどうか。岡山市では自転車貸し出し設備が充実しており、宇都宮でも同様に取り組めばもっと楽しめるのではないかと考える。自転車専用道路の整備もあるとよい。
	青木分科会長	・輝かしい未来は昔の原風景にある、と聞いたことがある。中村委員の記憶の中にあるかつての風景が、宇都宮の未

項目	発言者	意見
		来を考えるヒントになるのではないか。
	檜原委員	・MICE に取組むべきである。実際ハード整備が進んでいるが、あわせてもっと強化できるのではないか。観光面をみても、関係人口や交流人口を増やすにMICEの効果は大きいし、経済効果もある。宇都宮は東京から１時間という好立地であり、会議施設やエクスカーションだけでなく、大谷、日光、那須に足を延ばしたり、ゴルフも楽しめるなど、MICE を誘致する環境は整っている。宇都宮餃子３位というニュースを見たが、３位であっても話題になるくらい定着していると考えられる。食べ物は行って楽しめるものであり、海の幸ならぬ「丘の幸」として開発し、会議、エクスカーション、夜のパーティなどとセットで宇都宮の魅力をつくり出せると良いのではないか。
	三宅委員	・宇都宮を知り、発信するということをキーワードとしたい。最初に宇都宮に来た時、市民が自分のまちに誇りを持っていないことに気が付いた。それはなぜなのかと考えたが、おそらく自分のまちのことを知らないからではないだろうか。「知る」ということをまずは取り組んでほしい。最近学校では「宇都宮学」というものが始まった。歴史だけでなく誇れる産業の種のようなものも、ぜひ知ってほしい。
	岩井委員	・パブリックな公園のあり方も考えるポイントだと思う。 ・最近の公園には健康を意識した器具が置いてあったりする。宇都宮市にはプロバスケットボールチームやサッカーチームなどがあり、観戦スポーツは充実しているが、日常的にスポーツを楽しめる環境は少ないのではないか。気軽にスポーツができる公園のあり方を考えることにより、いろんな人が関わりあえることが街の魅力になる。 ・具体的にはバスケットゴールがあったり、スケートボード競技ができたり、フットサルコートがあるなど、民間参入もあるかもしれないが、市民が休日に公園でスポーツができる環境が整うと良いのではないか。 ・また、バーベキューや焚火のような、人が火を囲うことができる公園についても考えていってはどうか。市民の関わり合いが都市の魅力にもなる。火の管理のこともあるだろうから、安全に楽しめ、市の野菜を使ったバーベキューができると、市民の休日の過ごし方も豊かになるし、市外から人が来た時にも案内できる。 ・環境配慮、脱炭素が公園のシンボルとなることも考えられるのではないか。循環型の空間として体験することで、市民に環境配慮が浸透していくことにつながる。 ・公園のあり方について市民とデザインしていけるとよい。

項目	発言者	意見
		・食は文化だと思う。宇都宮では食の文化としては餃子が良い事例になったように、そういうものができる素材は今後変わってくるものなので、新しい食文化、飲食文化を生み出していくと魅力にもなるし、楽しみにお客さんも来てくれる。力を入れるとおもしろいのではないか。
	三宅委員	・岩井委員の意見にあった公園のあり方は、非常によい視点だし、よいキーワードだと思う。
	上野委員	・キーワードとして各委員の意見を聞いて感じたのは、10年よりもっと長めの問題なのかなと思うのと、現実性の問題が関わるのではないか。 ・駅西地区については、かつては「中心市街地活性化」として、宇都宮二荒神社周辺の空洞をどうするか、という問題意識で取り組んできた。宇都宮の顔となる場所で、LRT通す、通さないという西口の問題を議論するのではなく、どういったまちにしたいのか、を考えていく必要がある。例えばLRTが通ることで、環境問題を考えるならば、中心市街地に車を通さないということもあるかもしれないし、LRTを通せば公園を含め付随する問題はいろいろある。法的問題にも関わってくる。中心市街地活性化の時に、大通りに車を通さないとどうなるか、という検討もしたが、現実的な問題があって実現しなかった。 ・LRTの検討がすすむのであれば、大通りに車を通さないなどの取組みについても可能性を残してもらえるとありがたい。例えば、宇都宮城の再整備にあたっては、下に駐車場整備してはどうか、という提案もしたことがある。当時、市からは必要ないという回答だったが、まちの形が当時とちがってきており、車社会からの転換が必要となってきている。
	青木分科会長	・これまでの議論から見えたポイントを整理したい。 ・これから10年の取組みとしては、まずは市民が魅力を知るための仕組みが必要だということである。知った上で魅力を発信していけるよう、今はまだ具体的な中身はぼやっとしているが、隠れた魅力を知るための仕組みを整える必要がある。 ・なぜか、宇都宮では餃子の印象が強いが、そろそろ餃子にかわる全国に発信できる魅力が必要ではないか。そういう意味でも「文化」という面が重要である。宇都宮の文化として何が出せるのか、魅力を知ることにもつながる。宇都宮の文化として、市民がピンとくるものは何かあるか。ピンとこないのであれば知るところから始めることが大事であり、この先10年が重要である。

項目	発言者	意見
産業・環境について	五艘副分科会長	・宇都宮で近年の目玉施設となる東口のMICE施設についてである。国際会議や学会でもオンラインを活用したハイブリッド形式が増えた。ハイブリッド形式により会議を行うことが便利だとういうことが分かってきて、今後も増えることが考えられる。そこで東口施設はコンベンション会議だけで埋めるのはむずかしくなるのではないだろうか。そこで考えられるのは、近年、多くの人が取り組んでいるテレワーク、あるいは観光のハブ施設としてうまく活用できるとよいのではないか。コロナ禍でオンライン生活に慣れた人が増え、生活スタイルも変わってきている。 ・また、環境に対する市民の考え方、意識はまだ啓発できていないと感じる。かつて、宇都宮市でもアースデ-の取組みしてきたと思う。都内では大々的に取組みを継続しており、若い人が自分達にできることに取り組むイベントであり、宇都宮市でも続けていけると良いのではないかと考える。最近渋谷で気候時計をつくるイベントを実施している。クラウドファンディングで資金を集め、今後使ってもよい二酸化炭素を示す時計を作る試みである。そういう環境意識の高い、若い人が、楽に取組みを行えるよう、行政は支援していくことが重要なのではないだろうか。機構変動問題は、今後何十年もかけて取り組まなくてはならなく、次の世代が参加しやすいインフラを整備することが重要である。 ・宇都宮市では、昨年10月に若者の意見交換をSNSつかって集めていた。これはよい試みだと思う。若い人は直接意見を言えなくてもスマホならいえることも多く、うまくSNS使って若い意見を吸い上げると、スーパースマートシティのスマートの部分の取組みにつながるのではないか。 ・環境関連の事例もいろいろあり、世田谷のショッピングセンターでは建物の上にビオトープを作っている。先ほど街路樹がどんどんなくなる、という意見があったが、ビルの上などのちょっとした空間でもみどりを増やすことはできる。こうした市民に見える取組みにより環境の意識づけをしていくことが重要である。
	青木分科会長	・世田谷は環境活動がさかんな都市で有名である。過去に、世田谷区と比較して宇都宮市の緑が少ない、という分析をしているものを見たことがある。
	五艘副分科会長	・確かに世田谷区には緑の条例があり、環境に関する活動は盛んである。

項目	発言者	意見
	市田委員	・10 年後の未来を見据えた時に DX の推進は避けて通れない。地方創生に向けて解決すべき課題が山積みではあるが、デジタル技術を活用した解決というのが期待されている。一方、概して地域では DX が遅れているのが実情である。本日もオンラインで会議しているが、一人一台、機材が準備できていないのが実情ではないか。地方創生の主体となる地方公共団体において、DX を進めるのが一番先決ではないか。栃木県の予算では、県庁のデジタル化に多くの予算を割いていた。デジタル分野の専門人材の確保や、地域へのノウハウの移転、定着を図っていかないと、10 年先を見据えて発展性がみこめなくなる。 ・市には予算を惜しまず、将来の発展につながる施策を実施してほしい。
	岩井委員	・環境については、住民の理解を広げる意味でも、情報ではなく体感できる取組みが重要であり、まちなかビオトープの話は素敵だと思う。 ・産業については、全国や海外に向かう企業体が生まれるとよいと思う。2 月 10 日に宇都宮市のサテライトオフィスが入る CIC Tokyo に岸田総理大臣が来て、スタートアップ創出元年だというメッセージを出してくれた。国の方も５か年かけて企業の規模感が大きくなるような動向を支援するということだった。国が言ったから、ということではなく、世界のスタンダードを作れるような企業を育んでいく、というところは、行政にも期待するところである。ただし、行政だけがやればいい話ではなく、企業自身も強くならなくてはいけないし、団体の方もさらにトランスフォームしなくてはならないと感じている。 ・ただし、やはり投資家の存在は大きく、チャレンジしていくときに投資の部分は重要である。銀行からの融資は返せるかが基準だと認識しており、まったく新しいビジネスにお金を貸せないのではないか。スタートアップビジネスを応援する出資ができる投資家の集約やネットワークが宇都宮市で組めると良いのではないか。全国にも広がるような企業がもっと宇都宮から出るとよい。
	市田委員	・確かに、スタートアップ企業への融資はなかなか判断が難しい。しかし最近の傾向では、スタートアップ企業への投資は、ファンドを作り、銀行単独ではなく政策金融公庫等と一体となって出資するという動きがとれており、ファンドから投資している例は複数ある。ただし、全てが成功するわけではないところが難しく、出資がスムーズに進んでいないのが事実である。今後は行政を含めた連携をとり、地域のスタートアップ企業への投資ができる体制を整えることが重要だと考えている。

項目	発言者	意見
	中村委員	・栃木県はイチゴの新品種をたくさん発表している。しかしマーケットにその品種を流通させているのは、市内の人ではなく、市外の人のようだ。 ・60 歳ぐらいからカンボジアで仕事している。カンボジアではバブル期に寄付された井戸が 60 万本ほどあるが、どれも昔の日本の浅井戸であり、またカンボジアにはトイレがないため、井戸の水を飲むことができない。日本大使館から井戸の水を飲めるようにできないか、という宿題をもらい、ようやく解決したところである。 ・30 年ほどカンボジアに行っている。日本からの進出企業はたくさんあり、小料理屋や焼き鳥屋も進出している。しかし、栃木出身者にはあったことがない。もう少し栃木県民、宇都宮市民は、進出の気概をもってもよいのではないだろうか。 ・カンボジアへ行くと、日本ではこんなことかと思うものが新しい産業として伸びている。
	檜原委員	・世の中の流れ変わるきっけとして、DX の他に、身近な例ではコロナがある。コロナによりリモートも余計に進んだと言える。病気の蔓延や災害危機をどう管理していくのか、というのが産業を支える、延いては人の生活を支えることになり、危機管理は最重要であると言える。 ・日本の得意な車産業において、部品や材料が足りなくサプライチェーンの大切さに気付かされた。これまでは技術も含めて海外に輸出していたが、自国である程度のことができるよう、絶えず補強していく事が重要である。 ・また食料についても確保していくことは重要である。農業も栃木県や宇都宮市は得意なことであり、強くしておくことが重要である。 ・人口減少、少子高齢化が進んだ時、日本社会を支える外国人ではないか。外国人の確保・活用も重要だし、それに備える必要がある。
	青木分科会長	・自国である程度のことができる環境整備とあったが、宇都宮で実現するための芽というのは何かあるのか。
	檜原委員	・工業では工業団地があり、工業団地を頂点としていろいろな部品を供給する町工場がたくさんある。それを絶やさないように、また技術を高めていくようなところに力を入れていくことが良いのではないか。今ある資源を大事に使っていく視点である。
	青木分科会長	・工業団地では中小工場のネットワークがあると聞いているが、宇都宮の工業団地でもそういうものがあるのか。

項目	発言者	意見
		・大企業は独自に調達ルートを作るし、宇都宮商工会議所会議所会員にも工業関係の方がいて、某自動車産業の系列企業だということがたくさんある。それが今後、どこかに偏ったり辞めていったりすると、部品が届かなくなった時に大変なことになるだろう。そこで今あるネットワークや資源は維持していけるようにする必要がある。
	三宅委員	（画面共有） ・課題達成の PDCA に市民・企業を巻き込む。そのためには、頑張った努力成果が見えることが大切であり、デジタルを活用した「見える化」することが重要である。 ・より多くの活動成果をできるだけリアルに把握できるシステムを作り「見える化」し、そのデータを市民・企業・行政で共有する。蓄積されるデータをビッグデータ処理することで成果・課題を明確にしていく事が重要である。 ・蓄積されたデータを分析・評価し、市民・企業に伝える活動をしてはどうか。データ利用をオープンにすることで、民間にビジネスチャンスを提供することにつながる。 ・国はカーボンニュートラル実現のロードマップにおいて、2030 年までに少なくとも 100 か所の「脱炭素先行地域」をつくり、2050 年の実現に向けて脱炭素ドミノを起すとしている。厳しい目標であるが、宇都宮市には多くの素地がありチャレンジする価値は極めて大きいのではないか。 ・現在、国内のデータセンターの需要は伸びており、今後、デジタル化の進展とともに飛躍的にニーズが高まる。その電力消費がカーボンニュートラル実現を阻害するとの指摘もある。電力消費の中でシステムの冷却エネルギーが大きく、大谷の地下冷熱は魅力があるのではないか。安定した電源確保が課題になるが、首都圏に近い宇都宮市にデータセンターを誘致する価値は大きいのではないか。
	三宅委員	・先ほどから DX という言葉がでているが、DX はまちに適応する際に具体的にどんなことができることを想定しているのか。
	事務局	・宇都宮市でデジタルトランスフォーメーションとして具体的に取組みをしてきたことはない。ただしスマートシティの取組みは進めてきており、官民連携で U スマート推進協議会を立ち上げ、民間が持っている実証段階の技術やデータをどう使っていくかという研究をしている。その一つに、LINE の中に「コレメッケ宇都宮」とともだち登録することにより、クーポンの発行や、行動や家族構成に応じたおすすめコメントを送る、アプリシステムの実証実験を行っている。DX をまちづくりに取り入れるこ

項目	発言者	意見
		とは、生活に ICT をつかって便利にしていくことが目的だと認識している。 ・広報を使って、DX 使って街を変えていく考えを示すとともに、来年度は情報化推進計画の改定があり、その中で議論をしていく事としている。
	三宅委員	・これからの取組みということで期待している。 ・五艘先生からお話があったコンベンションの姿は確かに変わるかもしれない。これまでの延長線上で物事を考えてはいけないんだと感じる。
	檜原委員	・三宅委員の意見に関連して、普段の会議だけでなく学会などもオンラインで行えるようになってしまった。そうなると、来てもらう意味を持たせないといけない状況になっている。実体験、付加価値を高めていかないと、せっかく作った施設がもったいない。そういう意味でも、MICE の強化は必要であり、来てみてよかったという取組みを進めていかなければいけないと感じる。
	三宅委員	宇都宮のよさの中に、水道水のおいしさをアピールしたい。東京の水はかつて不味ったが、今はとてもおいしくなった。まちなかに東京水の看板がついた蛇口があり、自由に自分の水筒に汲むことができる。宇都宮の水の方がもっとおいしんだから、もっと市民や来街者にアピールできるとよい。
	上野委員	・各委員のアイディアで産業や環境に関する取組はすべて SDGs に関連してくる。宇都宮市は未来都市の看板をもらったままとなっているが、2030 年の将来像が SDGs の目標とちょうど同じである。何かしら取組みを SDGs に絡めることができるとよい。コロナ禍になってオンラインが急に普及したのは、不都合をプラスに変えた事例である。ごみ処理場が火災になったことで、ごみの半減は達成するかもしれない。これは意識の問題であり、やるかやらないかである。普通に取り組むのではなく、宇都宮として徹底して取り組まないと、取り残される恐れがある。 ・もったいない運動にも関わっているが、まだまだ地道な積み重ねが必要である。市民への周知以上に、自分が自信をもって取組み、外に発信する意識づけをしていくことが重要である。
	青木分科会長	・SDG s と今回の計画の関わりについて事務局から説明してほしい
	事務局	・冒頭のスライドで、スーパースマートシティについてご説明した。スーパースマートシティは、NCC の基盤の上に３側面がバランスよく調和して社会として構成されている状態としている。宇都宮市が目指すスーパースマートシ

項目	発言者	意見
		ティの理念がSDGsと合致しているものと考えている。 ・したがって、SDGs に対する個別の取組みというよりは、今回つくる総合計画がSDGsの達成をしっかり見据えた計画にしていきたい。
	岩井委員	・SDG s については大切だと感じており、宇都宮市のブランディングとしてSDGsの推進、そしてそれが市民に根付いていくことが重要である。 ・一般論であるが、自分達のやっていることがSDGsの17のゴールのどこに位置付けられるか、という視点で語られることが多い。本質的にはまったく逆であり、我々の行動を大きく変えていかないと地球が危機である、ということに気づくためのものである。ターゲットに向けて何をしなくてはいけないかを考えるべきであり、新しい行動を起さなければならない、というところがSDGsの本質だと思う。
	青木分科会長	・SDGs はやっていることがすべてに関連してくる、という視点が大事であり、宇都宮市はスーパースマートシティの中にSDGSを位置づけるとしている。すべてをやっていくというイメージを持ちながら進めるのが大事だと思う。
	岩井委員	・やっていないことに気づいて、やっていかないといけないのではないか。自分達の日常を続けるだけでは、状況が変わらなく、思いっきり行動を変えなければいけない段階にきている。SDGs は今やっていることにゴールのラベルを貼る作業ではないはずだ。
	青木分科会長	・その通りだと思う。 ・自分達が環境のことを考えて、普段のことをしっかり取り組んでいけばいいんだと思う。昔から言われているシンク・グローバリー、アクト・ローカリーというのがまさにSDGSにつながっていくんだと思う。
	岩井委員	・極端な話をすると、地球環境を考えれば、車に乗っているようではいけないぐらいのことではないだろうか。SDGsはもっと重いものと捉えている。今やっていることを意識すればいいレベルではないぐらい、地球は危機にあると感じる。
	青木分科会長	ご意見として伺っておく。 本日のとりまとめとしてお話したい。(画面共有) ・画面に示している図面は、環境省が生物多様性国家戦略を作るにあたって検討している内容である。この中には脱炭素のロードマップ、LRT、公園ネットワークなど、今日話に出た内容の多くが盛り込まれている。 ・環境と産業、カーボンニュートラルは、不可分の内容であ

項目	発言者	意見
		り、そういったことも含めて次期総合計画には盛り込んでいけるのではないかと考えている。 ・例えば、温暖化とカーボンニュートラルについては、前回も適応の考え方をお話したが、減らすための緩和策とプラスアルファで適応策が必要である。宇都宮市では既に田んぼダムに取組んでいたり、宇都宮市総合治水雨水対策推進計画に基づく推進していくというのが、今後 10 年間の大事な取組みになる。 ・また生物多様性では、国が「みどりの食料システム戦略」をつくり、2050 年までに有機農業の取組み面積割合を 25%（100ha）という目標が示されている。農業も環境に配慮しながら取り組んでいくという流れが出ているので、そのあたりも計画に盛り込む必要がある。 ・さらに防災面では、グリーンインフラのことがある。最近は NbS といって自然を活用して減災に活かしていこうという Eco-DRR の考え方や国からも流域治水の考え方が明確に打ち出された。カーボンニュートラルと生物多様性を含めて、様々なものが複合的につながっていく ・第 3 分科会で話をしてきたが、今回の計画を検討する際は全体を通じて「こんな街になる」という環境省が示す図面の宇都宮市版みたいなものがつくられると、市民にもわかりやすく伝わるのではないか。「見える化」をしていくことが大事である。この計画が将来の宇都宮市につながっている、ということが示せると良いのではないか。